

句兄弟
上





夢白



句兄弟序



悉ハ轉ナリ轉ハ反ナリ之ヲ洩セリ
より〜案スル句その類作新
古混雜〜〜〜
は諸〜〜〜
は〜〜〜
厚乃吟之を狂〜
点の付ル者其ノヤ〜

あつて——は乃の譬喩方便
もれを信ぜ一智也 諸句兄
中へちなる海をさるるを

昏の各々——傳る

元禄七甲戌稔東屋初五

晋其角

一番

兄

負室

こ流し〜とほろむのう〜野山

弟

晋子

こ流し〜とほろむのう〜野山

花満山の系を上五字に云とて
芳野山と決定——る所作者の自
然地をゆりても詠諧の以深山

あるへ——花のうらめとちよふあはて
ちるもわくくといへる和句や先づくと
そよとの云下——或又特で——とて
難云吉野山一句の本筋——上五字
七字まじは只ありの例なるへ——ちるもと
振のうらめようつ——る本をさぬ句を
へ——答云句は其奥を因はへよや
景情のえあるといふる難談集
論せばこゝや近くいへる先年
明星やさくく定めぬ山——と

き——句当はよふと興感せしむ
芭蕉翁吉野山よあはてる時山中
義景よけをされ古きものも信を感
せ——叙め星の山あつては明はるくお
け句のうらめ——くさくはは文通ふ
尸さしける是をうつるの面目ななり
おもふ時八満山の花よなほぬへよ一句
乃含みぬ——やむ花の前後を云ふ
聊も句心あやまるへくれ況全期
句を盗む癖とい等類をのりて違ふ

二番

兄

拾穂軒

地主くハ木の岡の花の都より

弟

京中へ地主のさくや花胡蝶

老師名をきく句に反指して市中に蝶を
清水の落むと人なりとも木ありと
ちよなりとぬきりて侍る花街

こころをみえぬの事をいふ
また先後の句をきくや花の蝶
よいにハ 蛺蝶飛来過墙去却疑春
色在隣家 他例多く因ゆきと予
京の二字をけられむ花より

三番

兄

素堂

又是くしき花一見と なりあり

弟

亦是うき本屋一見のほ——式

遊子行残月とや花よおほし人の
昔の名跡を惜みん心をうきいけと
帯う句うきふとくもぐてまはあ一見
といふ花のかへるまはさう——ゆへ金く等
類あふいとたかりたりとふま堂う平生
口癖ふとハ是を格よハ取に——と
云題よてふふうつふとたのみあふとふ
——は句うきふとくもぐてまはあ一見

云くふとく強弱の辨をわうつものや

叩番

兄

肅山

祐成の袖引のふ勢むう千鳥

弟

むらうとく其おのき——虎の汗モト

袖いのとせとふ一衣洗濯のめちとく
さひうり——高名乃士ありふと破スル襦袍

残著て孤谿に耻さる勇を思ふ合
 るるや村の多き交りてその志
 を志のそれ一句は感概ありより
 其おゝ虎ももに志のそれ一句は
 引のそれとておもひよりその志の
 川ぬき其のそれとて追又て其の
 各句合意り然之兄の句は寒し
 りふ字のそれとて同じ侍とてその

句分あり

五番

兄

伝記

雨の日や門提りりかきく

弟

簾かけのそ提り

杜若

杜若雨潤の一筋の節のそとよく
 立しれども難して雪中の梅花を
 のそ一周のそをけし俗の
 句中よくまれて一句の外に作

うすーとれと向上の句より終てへ部
と定うけー其心ゆゑうあゝと
多うる中より杜若景物乃一品あま
と呉むよりと魚を取ぬへくや雨乃
杜若とおもひあゝとんく句他のこ
なりーとてまぎひるふ所し老功の
作者誠談りてうまゝあゝとんく
おくとんく送るーとぬの我宿り
入来る心より又ユーとぬのや下もそ
のよりー色をももあをも厭けぬ

さあけすれすけと下あゝと
かり往と来との二字よりて力誠
わづらゝとと判談せん人あゝとあゝ
へー回答の句なるおへつりて

六番

根棘の愚心さす戸侍

兄

曲水

三弦やうーと山哉佐月 雨

牙

と味除やふ衣よるむ五月ぬ

よせこつ毛吹時代の老僧をよめる
所なりとて毛吹やとて耳をきく
句よりハる魚のさかるといふや

八番

兄

露沾

は惜ま所走の菊は齡つる

才

秋よりあへ所走の菊もす多白田

中七字詠^{モリハヤ}を以て一筆如昏の惜

まゝと詠ぐては霜雪の凋むふ
後と對をいふはつゝは菊の
秋後の菊はさそふなり久次女と
句とてちよまりも菊の情に
一て光陰を惜むと待とるや

九番

兄

岩翁

遠磨忌や朝日は俗の歌に師

才

を磨るゑや自利にあらざるの鏡

論俳句如論禪、日の影と水影

美ふる一空房獨坐の似て

十巻

いぬの二首一物な

兄

千風やけのひるるに於小舟

舟

ほー瓜やうきけはるき盛小舟

此舟は古来掉子の秀、他よりして

と云ふくまをたはると等す、然の難非

の、然るくまを侍とて平澤のふ

中、詠する、然るくまを侍とておもしろ

つあけて、千とてゆ、あら兄の句を

うて、いともやあらく、一舟の形容

は、と云ふ字のけ、いとも又轉せると

みる人も才、弟、うて

懐古、吊古、古をいへ

十一巻

兄

杉風

屋形舟上りて横教子と利

才

屋形舟上りて女中出たり

暮春の至情とすぬハ様どなりを
色もむてと伝ふよりて風光いつ
れりうつる人のあはれみと
後中上卿と向對して渭北春天樹

江東日暮雲とわ句成かててむえ
ぬ中ちりあん後ろ梅しと満と
おもひやとえんげぬよりてとどり
春をたぐさあけん山水道遠の人
十二首
興趣句外にある

兄

杜國

馬ハ鳴き牛ハ夕日の北へ

才

紫ハぬきて牛ハさふく時外

け二句いかにびをふらうとてさよて
たれ衆多く同くはさよとてさよと進
半後ろ歩みて斜陽のさよりとて
風景と柴のつくのおもくみて牛ハ
さあゝゝの面をあらせゝるあねゝ
そとくゝおつとてさよや

十三番

句の面よて兄サくゝゝ

兄

神叔

うつゝ火よ土器よぎゝ 白このな

弟

煙火やうゝげかけゝいちやよ

兄ハがさの雨成滝て院との友成
してなりゝるみさゝるあゝ言ふ
おゝいゝるいぢり焼いゝるあゝとて
らんちん乃真を今の俗言よれちて
白川とふ句のさよひをわちぬ柴
火三盃乃ゝのゝゝやむ所ふ
あゝゝゝり冬夜即事の反轉

十卯夜

兄

古梵

この村のあそびのうたを鳴るや

弟

あそびのうたをみるらんなるを思

窮民はあそびに耽む田家の神祇は
下愚のうたを心を用ひていふまゝ
あそびの音をうたふ哀なり秋に

とふともわいと悲しむん^{アハハ}農の
至誠なまそそるその心を起し
る歎きとえ性を一つうつーけるもの
そと憐れむとて列子は鷗心をうつや
みたる事實をとりうたのえはる

十五番

ぬへー

兄

許六

人笑ふ一賢師の裕や衣更

弟

は種も島の下着や衣かえ

二句とも平目ふるをよものり思ふ
よきこと自句節小袖なまもさへ
やと勘弁やいつともぬきの片あり
衣ふといふてハ花な一は種と数る所
よのふりす一ふ一とこなれども無きよ
らきあるゆへと一列より

十六番

兄

去來

浅茅生やぬきのちふれむしの声

弟

ぬきのちふれ松虫とるは浅茅哉

野をまてしめて國一虫のちの
あさけうなようめーふうな 寂蓮
近く虫のちをまて秋情をうする
心を一句の上よ云流してぬきの
しる人咽風のちよとる人しる 静

遠近わくまわくふれしは
あつちも各自各とちふく

十七

兄

外我

海棠乃てなほ満きり夜月

才

海棠花のうつやおほ月

睡まゝも文字は満ると云字は通
ハ一と満月のちめまを春奥
なり然れ一句のこしくしお所ある
自句まゝめて優越よ句のやを
起向もつらもつたれもみらる
云る所をうつや睡とみりて
めいれや煙花や雪とまのびる
境は分別はる一先をのいつる
のり吟心はさきさきも余
精さのささや

十六番

兄

立圃

むいふふふふふふふ 童うふ

片

元ひふ 袂に御乳のふりし

至愛の心より作者の功をあはれし
一うふもやふふのやすふなる所
又ふふ妙句なること都鄙にふふ

句に云ふなりきふふふの
教句を祇賞せしつゝは古版
の書に埋もる侍ふを希歎羨して
古人の深察を再轉せりお乳のふり
ふふふふ物にふふ童うふは袂に
次かふ童子とふ手紙にふふ類句の
難を述ふぬへふふふふふふ
ふちふふふふふと答ふしぬふ
ふふふと塵につけふふふふのふふ
思ひやふふ成長をふふお乳の

心もたふらふあつせりや同惜少年春
千載不易の句をなかりて轉換す
ちのれと評不はふりや

十九番

兄

亀翁

寂人を泣く起る余るを

才

酒をうと蒲団剥きり柔の

冬解百日を二百句より友吟せし時
ぬく酒酌の即無の耐寒のそろ
りち信ふあつと客と音趣

廿番

兄

赤ら恵
毒

啼る人笑つりりりほとる

才

何とこりハ木兔笑へや

人情を假て笑へといへる俗き女の
質なり此句はをのぶ侍宵の名言
を視みひきて人口にあるおかしき
類作の便えもあく一人一句よきもの
侍るにやあしく笑あはれ心のと
さう視るに近曾露穴といふ所より止
宿しては月やみのおぼつたあき
鶴鳥の啼をきぬ神々しく
ぬえたりや此曉のほろろあけ
と云て明くさつる梢をえり

いれど新あつて肌よと縛りて夢雨の
のろろと榎の木のおろろとみはく
とゆりて日影をわくはさぬを色く
乃ちこれ笑ひあはれあはれあはれ飛
ちりけるなおりく思えねえ笑ひいふ
と云ふ奴女とおもひも侍りてかこの二
よりと云合しり蜀の魂といへて滅
りてさう啼血とつくりしことをり
よそむけて郭公笑やといへる私あ
はれさうあはれと和子の是のたすけ

少〜てその花をち〜に細腰ハキを大
長刀よりけてともよめるくれき等ハ
新緑のつ〜く〜れ毒ヲ笑へ〜
見〜と答〜を魚〜ふ〜ふ〜
笑〜て兄弟の倫ヲ及〜

廿一番

兄

歌棠

つ〜ふ〜や牛と〜と〜相撲取

弟

上ふかと名も優義也まよひ取

句の裏へ〜〜これと句すまふり
一〜〜牛と〜字よりけて

廿二番 上ふと立あ〜〜や

兄

宗因

人〜〜け〜や〜月か〜〜知れ

弟

昔〜〜や〜月〜〜〜

杜甫子平字血脉の格ありむ意味
ある字なり句をさくさく字の中
をさくさく入る名付さくさく格あり
しる句血脉の格をさくさく
さくさく懐感の老衰をさくさく
指ありさくさくさくさくさく
おさくさくさくさくさくさく
初さくさくさくさくさくさく
老さくさくさくさくさくさく
深思さくさくさくさくさくさく

差ふなり一向俳諧の血脉
さくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
血脉通さくさくさく

廿三夜

兄

東順

さくさくさくさくさくさく

第

雪より入月やちろりもぬしのこ

七又三十年前の句や風俗うつされ
とも古風をうつふよりこゝろあら
句論より及る寸死の如きものなり
又あらたき世なりけし書のかみは
かよへて侍の山よりもくさるは
竹よりつ菊の子をちかきこそ
るハ歌よりわたりてこそあらふは
クスリ

乃出する一とあるはさう一と思ひの

かの追々

たの番

元

仙化

はくくく 昼圖の免やあつた月

外

つくくと望のうもよやえい

こころのうて決断せりあつた
いふとわつた 國の免を望せし

云字よへそふと不居のふりも
宜しく一室句は又免の鼻やあつも
ふと云ふとふとくまう人のさぬ
ふも成るやふもふもさるに
おふふとをりしをふ曲をふとん
とて曲流は落る句の出くるものな
と作者よく沈吟す

サニ番

兄

僧路通

大佛うしろは花乃盛か

弟

大仏膝うつむくおもの雪

東叡山のお吟也池を左に
致景初なる所をばと心付ふ
花の筵乃お場や、や山守のち
く花を暫時もふに掃あつ
ふふ一梢の外よりうるぞ入あ

ひきもろあまうそーと

おほよこり

廿五

元

儀道

ゆきあふまきと衣や新鼓

分

浮勢は体にもて誠新なる

一と都よりあまをわーの

はるま咲とよえー瓢箪のきり

ひて面白く強ひけるを酒のみ有ると
口つさけるあけりて来り

第ふせあふもみせん新なる

とひきりけるものちけ句同しはる

志きと衣やと云りしと新ぬ

咲る思ひしとー自句寒夜行の

信を都てふとく一流の音声の

まて物よひとれむーやとれん

今めきとる白作りな心うすき

俳諧のしとをわけて邪路は

ちの一句をぬく人の感をつらう

廿七番

兄

越人

ちのちの心安とよ明子の心

弟

ちの心ハぬく事のおもひ

尋常の心より中々字々俗
を立くるハ荷分故人等々ぬく所

も癖也是ハ別僧とよおみそ
一句の心より中々字々俗
風もいふ心より中々字々俗
自然なる心より中々字々俗
あつた此花の念なりちの心
むとる心より中々字々俗
のちの心

廿八番

兄

玄札

あめりけの句歌集とあるもの

廿九番

兄

秋色

舟梁乃ちあゝもろねのなみ

中

永くは枕のや路や国乃ち

牛島とらふやうりよ捨人ありその

かゝる間て月夜に帰る時らるる
舟より川へ海のきりきり月よみ
あゝ水の面もくまなくあゝおの
こく流るまゝあゝも海よりこ
りよ永くは枕のや路や国乃ち
よりそあゝあゝも海よりこ
をとおひやる心地つるをさるる
国の外やうめうめいひらへ外
めさで枕のつおもさゝもみ
そりしとくみしとく

予の筋のすへー

三十歳

兄

春澄

草刈や牛よりあておとた

中

牛のの^{コメコ}堀りあすふせりむ

通船乃馬を引くそくはれのまの

名ふところも京の布の二他ありめと
文字の所着をふれすや新吉の論を
立てしつゝたふもあそふ田舎のけり
ありしもの名にあらそふよふあれと
あるより文字もわづつけちるる
是の寺の俳諧の推原^{スモトラ}也

三十一番

兄

東山

あしやうむめあひあふるる

力

とてやほむ新ハ新ハ利

兄うらま田舎のうまのちあねも
うまのちあねも

片うらまおまのちあねも
竹田のちあねも

三十二番

兄

柴栗

余持ハ大根新ハ新ハ利

兄

余おまのちあねも

屏風の絵をよまね

町のあひの神をよまね

あひの神をよまね

あひの神をよまね

あひの神をよまね

あひの神をよまね

せうふ字まで面白く立のゝ伝る
 川の菜つむ大言人のつゝまゝろろも
 ひもおふく秋の色やとゆん
 君の野遊の海さぐげると片く
 ぐい列といと奥あさ下船のさうぬ
 二十と中ぬ

兄

尺牘

須磨乃山白干力ふーかんこも

余はこも野はこも山はこも

いふれ山うしろは何を訴はる

都難波のまを秋を控ひては戸明石か
 吟ひける日記よりん山侍るや無伴
 獨り相求伐木下この幽景をそとへて
 けり似より浦と去へき山とへる其場
 なるすーていはるこよ字やこれの字
 心をつげんぬ句の馴熟いあゝとや
 心所不片有餘趣とすとやせむ白

にふかきとぬき風情を記
浦より中なるもつらふしるま
ゆをともめしれと身は中目より
けすの境自然を志るへ

二十四番

兄

西鶴

鯛はむいぬ里もあききよの月

中

鯛はむい江戸もあききよの月

花をむきし心よりて二十四里の外の
心よりて一句のそ尾継類なり中七字
力をかえて啓蒙期り樂なりあききよと
てとれば江戸もあききよと住よりぬ
なを月をむきおの魚のあききよけふ
初めて字景嘆時のおもひ感今懐古
未二年字世の月をむきと鶴
と云ふえおもひとてハ歌なりと
三十五番
今ハ故人のやなり成ぬ

元

字白

中より一友窮るるを

中

そはしつゝあめ鳥や蜀泥

短歌の道なきを恨みてなくつゝ
ゆるふのふとくふ帯よりうろくしけ形
ハ郭公のみだるふは神も題一色
賞物ある人縦横をわくら侍るハ

能くより業し入るははるこーおふ
ハ物よりきこふ心もくもやけふ
耳にえゆるすなや

郭公啼く飛るはるハ
つゝもやあやめふ音も時角

此神々能くよりおもひ入るも
是等の格法をばさへんハ縦横混
雑しつゝも句はりそむくへ
縦ハ花時鳥月雪柳梅の折り
ふきて詩より連能とも通角の本

題に横ハ五采ヲ入ルヲキ
より初シ火燄餅ヲ燦拂鬼
うつ豆ハ数くある伏誼歌を以て
ケルと云 縦の題ハ古詩古事
本と云ふより是等の式例を定めて
文章乃力をより私の初あるもの
ゆゑをまつよけし横の題みてハ
洒落ものも我思ふより自由
云々トしはよく論じは縦
かと云ふてあるを他より時々の

其数句セーを以てはあある
やハ甘念く句と云縦横を
いふづまおむらふと云
人の師なるをよある人
と云縦横

三十一

兄

五十一

風まつをすのなかりけつはあは

や

九合羽くくぬ雪やふこの山

中

青漆を雪の洗ゆやぬ多羽

右代りぬ言ぬ雪あつぬ袖は
とらふ形より中をよりをよ
ぬくよりをよりをよりをより
續腰の格よりをよりを

ふ十八番

兄

轍士

風の音をけりぬ下り石を

力

冷酒やもーその下弦石をみ

一句の涼味をうめる人皆苦炎熱
我愛夏日長薰風自南來殿閣
生微涼東坡を百世の師とて云
ふやそりあつて地をくくぬ中時

絶つてよき暑のさぬらふくと思ふ
合ふとも起外せしむるをうけ
笑ふよといふや入集の歌を頼む
魔^{モタイ}を拂て辛吟をうさむる返書
り及びぬ夢も根あゝ青袖あり
小室をさるるをね眺観の人石上
詩を題して緑苔を拂やとふ
ふのしみをいすをい

三十九番

兄

音子

おろろて猿の歯白く岑の月

介

芭蕉

塩鯛の歯並もさく魚の店

是も冬の月とくふよ山猿叫^{コエ}
山月落と作とさる物すくさ巴
峽の猿よとせと冬月の月ふくさ
なると衣^{ホス}色と作と詩の余情

ともなるや此句感じのうすにて塩
鯛の歯のむき出さるゝと冷——くや
おもひよせられん表零の形より人
なりて老の果年のうれしきと
きぬへき五あ字を鯛の舌とてきき
しるゝ活語のめをききし其幽深
玄遠なり達する所知らざる人
ある人——け句ハ猿の歯とやせし
合せられしあはれしかるゝ
侍る人海士の歯の白ふはるゝ猫の

歯の冷——くや——似て似ぬ思ひ
よりのあな句は成す——おろともよ
作さるゝ侍るゆへ予り句先は
て師の句分と分其拙骨をけり
侍る師設もさるゝ同ん侍るゆへ
自評を用ひし——句はをのぶこの
後又轉——て鯛の歯白——堂の歯
や——侍るゆへあな句のつ新
侍る人ハ侍るゆへ新ゆき
あな句一句の歯をわいて甘き

